

評価項目②

学習成果の達成につながるよう学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。

<評価の視点>

- ・学習成果の達成につながるよう、教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
 - ※ 具体的な例
 - ・授与する学位と整合し専門分野の学問体系等にも適った授業科目の開講。
 - ・各授業科目の位置づけ（主要授業科目の類別等）と到達目標の明確化。
 - ・学習の順次性に配慮した授業科目の年次・学期配当及び学びの過程の可視化。

参照資料

- ・R5 設定の主要授業科目表
- ・R5 設定のカリキュラムマップ、ツリー
- ・単位修得要領
- ・シラバス
- ・学修行動調査の学修時間に関する設問（大学）
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

教育課程編成・実施の方針に基づき、データサイエンスを構成する3つの領域（数理・統計系科目、社会ソリューション科目、情報系科目）の基礎から発展までの内容を学ぶ。データサイエンス学部は文理融合学部であるため、特に1年次には3つの領域の招待科目（リメディアル科目）を配置し基礎を丁寧に学ぶ。学科専門教育としては、1年次から順次積み上げる形とし、データサイエンスに必要な3つのスキルであるデータアナリシスカ、データエンジニアリング力、領域知識・価値創造力を身につけるために、統計系科目、情報系科目、社会ソリューション科目の幅広い講義科目から成る体系的な教育課程を編成・実施している。専門教育以外にも、1年次に、少人数でプレゼンテーションや質疑応答・ディスカッション行い、レジュメやレポート作成等のアカデミックスキルを身につけるゼミ演習科目（必修）を配置している。2年次にも同様の少人数のゼミ科目であるデータサイエンス基礎演習を配置し、3年次には研究室配属（各研究室6名程度）を行い、少人数のゼミ科目であるデータサイエンス実践演習により卒業研究の準備を行う。4年次には、それまでの教育・学習の総括としてデータサイエンス上級実践演習、卒業研究を配置している。学位授与の方針と、配置している授業科目との関連については、カリキュラムマップにおいて示しており、カリキュラム全体の体系性については、カリキュラム・ツリーを作成し、オリエンテーションにおいて解説している。授業科目とその編成についても、令和8年度に向けて、計画通りに教育を実施すると共に、完成年度後に変更が必要か否かを令和7年度に検討する計画である。

評価項目③

課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。

<評価の視点>

- ・授業形態、授業方法が学部・研究科の教育研究上の目的や課程修了時に求める学習成果及び教育課程の編成・実施方針に応じたものであり、期待された効果が得られているか。
- ・ICTを利用した遠隔授業を提供する場合、自らの方針に沿って、適した授業科目に用いられているか。また、効果的な授業となるような工夫を講じ、期待された効果が得られているか。
- ・授業の目的が効果的に達成できるよう、学生の多様性を踏まえた対応や学生に対する適切な指導等を行い、それによって学生が意欲的かつ効果的に学習できているか。

※ 具体的な例

- ・学習状況に応じたクラス分けなど、学生の多様性への対応。
- ・単位の実質化（単位制度の趣旨に沿った学習内容、学習時間の確保）を図る措置。
- ・シラバスの作成と活用（学生が授業の内容や目的を理解し、効果的に学習を進めるために十分な内容であるか。）。
- ・授業の履修に関する指導、学習の進捗等の状況や学生の学習の理解度・達成度の確認、授業外学習に資するフィードバック等などの措置。

参照資料

- ・シラバス
- ・ALCS 学修行動比較調査（1・3回生）
- ・授業アンケート
- ・学修行動調査（大学）
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・その他参照した資料（ ）

【現状分析】

データサイエンス学部は文理融合の学部であるため、特に1年次、2年次の理系科目（数学系及び情報系）については、講義科目と演習科目をセット科目として学習の理解度と達成度を高める工夫を行っている。シラバスに記載しているように、授業中及び授業外の演習問題への解説やフィードバックを丁寧に行っている。令和5年度の授業アンケートの結果では、専門科目が増えた1年次後期は1年次前期に比べ、科目の難易度（平均）は3.44点から3.64点へ増えたが、理解度は3.74点から3.81点、フィードバックは3.91点から4.07点、目標達成は3.65点から3.74点とそれぞれ増加し相対的に良い評価であった。DS学部は文理融合学部であり、文系学生は理系科目に、理系学生は文系科目に難しさを感じていると考えられたが、丁寧な講義が行われたと考えられた。2期生に対しては、主に年内合格者に対して4名の学部教員の録画教材による入学前教育を実施し、生徒の入学までのモチベーションの維持に努めた。

最も配慮を要する文系学生への数学系科目の教育については、入学後はデータサイエンスカフェ（DS Café）という自習スペースを開放し、毎週教員が学生からの質問に回答する時間を設定した。更に、令和6年度はDS Caféにおいて学部2年生のアルバイトが1年生からの質問に回答する時間を毎日設定し、学生間で学びを深めあえる体制をとっている。その他、毎週水曜日に必要な学生に対して予備校講師による数学補習を提供しDS Caféで教員も毎週1日学生の質問に回答する時間を設定し、1年次の文系学生への理系科目のきめ細やかな教育を行った。他方、企業や自治体のデータサイエンティストによる実践的講義を複数行い、令和5年度は1年生全員が13の企業や自治体のいずれかを訪問し社会人の方々とコミュニケーションをとり社会でのデータサイエ

ンスの活用を体感した。令和 6 年度も 2 年生が現場見学を行う計画である。更に、令和 5 年度はアカデミックカウンセリング (AC) をすべての学生に対して年 2 回ずつ行った。AC では各教員が 15 名程度の学生を担当し各学生に 15 分程度の対面面談を行い、大学での学習や生活面の問題点の早期検出に取り組んだ。令和 6 年度の 6 月にも 2 学年に対して実施した。以上の活動は完成年度後も継続したいと考えている。また、令和 5 年度は学科会議において、各活動の最適な実施方法を継続的に議論した。

自己評価：S (A) B・C

評価項目④

成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。

<評価の視点>

- ・成績評価及び単位認定を客観的かつ厳格で、公正、公平に実施しているか。
- ・成績評価及び単位認定にかかる基準・手続（学生からの不服申立への対応含む）を学生に明示しているか。
- ・既修得単位や実践的な能力を修得している者に対する単位の認定等を適切に行っているか。
- ・学位授与における実施手続及び体制が明確であるか。
- ・学位授与方針に則して、適切に学位を授与しているか。

参照資料

- ・シラバス
- ・授業アンケート
- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問（大学）
- ・ALCS 学修行動比較調査（1・3 回生）
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

シラバスにおいて成績評価、単位認定の客観的な基準が明記されている。成績の評価は、数学系の講義科目等であっても 1 回の筆記試験のみでは評価せず、授業への取り組み、授業時間内及び時間外の演習レポートの質、試験の点数などを定量的かつ多角的に評価して行われている。評価の標準化については、ゼミ科目や各招待科目のように 1 つの授業に複数クラスが存在するものについては、学科会議において教員間で評価の分布に大きな差がないように評価方針の統一を図り調整を行った。科目全体を通じた成績分布についても、学科会議において各教員に成績分布が共有され、成績評価のバラツキを低下させる重要性について共通認識をもつように促している。また、評価の公平性については、2 回生の学修行動調査の結果、成績評価の適切性について「科目によりバラツキがある」と「自己評価より評価が高い」の割合が他学科よりも若干高いが、概ね他学科と同様の結果であった。学修成果の満足度について「満足していない」の割合は 4%、「ある程度満足している」以上の割合は 78.5%であり他学科と同様に高い値であった。学部 1 年間のみの評価の公平性に大きな問題はないと考えられた。

評価項目⑤

学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。

<評価の視点>

- ・学習成果を把握・評価する目的や指標、方法等について考えを明確にしているか。
- ・学習成果を把握・評価する指標や方法は、学位授与方針に定めた学習成果に照らして適切なものか。

参照資料

- ・各種アンケート（ALCS 学修行動比較調査、授業アンケート、卒業時アンケート等）
- ・ジェネリックスキル測定テストの結果

【現状分析】

学習成果の把握・評価について、令和5年度はすべての専任教員を構成員とする学科会議を合計28回行い、1年次のゼミ科目や3つの領域（数理・統計系科目、社会ソリューション科目、情報系科目）の必修科目への出席状況に問題がないかを毎回共有し、問題点の早期検出を心掛けた。更に、すべての学生に対してアカデミックカウンセリングを年2回行うことにより、学修面の状況把握に努めた。各授業の成績評価は各教員がシラバスに則り公正に行っている。最終的な学習成果の把握及び評価は成績分布の可視化データと学生に対する授業アンケートの結果に基づき行った。学科会議において、成績及びアンケート結果の分布を教員間で共有し議論した。評価項目③で記したように、授業アンケートの結果も概ね良好な結果であった。

評価項目⑥

教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価の基準、体制、方法、プロセス、周期等を明確にしているか。
- ・課程修了時に求められる学習成果の測定・評価結果や授業内外における学生の学習状況、資格試験の取得状況、進路状況等の情報を活用するなど、適切な情報に基づいているか。
- ・外部の視点や学生の意見を取り入れるなど、自己点検・評価の客観性を高めるための工夫を行っているか。
- ・自己点検・評価の結果を活用し、教育課程及びその内容、教育方法の改善・向上に取り組んでいるか。

参照資料

- ・過年度自己点検評価シート
- ・卒業時アンケート（大学）
- ・資格取得状況
- ・進路就職状況
- ・最低修業年限内卒業率
- ・過年度のFDの取組企画と振り返りシート
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

教育課程及びその内容、教育方法の定期的な点検は、学科において定期的な自己点検を行い、学科会議において結果の吟味と議論を行っている。1年生の成績や授業アンケート結果の分布を可視化し、教員間で共有し評価及び意見交換を行った。令和6年度現在、データサイエンス学部には1年生と2年生しかいないため、将来的には進路就職状況等も学科の教員間で共有し評価を行う計画である。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

新学部設置の令和5年度から、通常の学部教育に加え、3つのことを行い一定の成果を得た。1つ目はDS Caféにおける丁寧な教育である。特に数理・情報系科目の補習により文系学生を含めた全学生の学習レベルを上げることができた。また令和6年度はDS Caféにおいて2年生が1年生を指導するという好循環が生まれている。2つ目はアカデミックカウンセリングによる全学生に対する個別面談である。各学生の学修・生活面のきめ細やかな対処につながったと考えられる。3つ目は企業や自治体におけるデータサイエンティストによる実践的な講義や現場見学の実施である。理論や基本の勉強には忍耐が必要であるため、実践的な学習により学生の学習意欲が向上したと考えられる。

【問題点】

データサイエンス教育における課題の1つは、文系と理系を含む不均質性の極めて高い学生集団全体に対して、平均的な学習成果を高める方法を開発することだと考えられる。FDにおいて、文系学生に対する数理系科目の教育と理系学生に対する価値創造科目の教育の最適なバランスと数理系科目とPBL科目の最適なバランスについて教員間で議論した。継続的に検討すべき課題である。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

長所に挙げた3点は教員の多くのエフォートを必要とするが学習成果を高めるために継続したいと考えている。ただ、教員資源にも限りがあるため、効率的な実施方法を継続的に探索する。問題点を改善するために、令和6年度にはFDの一部に学科の1年生と2年生の代表学生を中心とするDS学生キャラバン隊（仮称）に参加してもらい、学生からのインプット及び学生と教員間での前向きな議論を通じて、より良い解決策につなげたいと考えている。

学生の受け入れ

1. 現状分析

自己評価：S (A) B・C

評価項目①

学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公平、公正に実施していること。

<評価の視点>

- ・学生の受け入れ方針は、少なくとも学位課程ごと（学士課程・修士課程・博士課程）に設定しているか。
- ・学生の受け入れ方針は、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法を志願者等に理解しやすく示しているか。

参照資料

- ・学生の受け入れ方針
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

データサイエンス学科は、学生の受け入れの方針を明記し公表している。大学に入学しデータサイエンスの学位を取得するための、基礎的学力、素養、意欲を備えた学生を求めている。数理系の基礎的学力に加え、コミュニケーション能力や社会におけるデータの利活用への関心が必要である。文理融合学部であるため、文系と理系の両方の学生が選抜を受けられる複数の選抜方式を実施し幅広い受験生に機会を提供している。これらの情報は、大学ホームページにおいて分かりやすく提示し、求める学生像を明確化している。なお、各選抜方式において、複数の教員が選抜に関わり明確な基準に則り選抜が公平かつ客観的に行われる体制がとられている。令和8年度の学部完成に向けて、現在の学生の受入方針計に則り学生募集及び入学者選抜を実施すると共に、完成年度後に変更が必要か否かを令和7年度に検討する計画である。

自己評価：S (A) B・C

評価項目③

学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・学生の受け入れに関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
- ・点検・評価の結果を活用して、学生の受け入れに関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料

- ・実志願者・延べ志願者推移
- ・入試区分別志願者推移
- ・入試区分別累積 GPA
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料（)

【現状分析】

学生募集状況については、学科会議において全教員で情報を共有して分析や対応策を議論している。延べ志願者数は、新学部開設の令和5年と令和6年にそれぞれ443名及び339名であり約23%の減少であった。一方、令和6年度の実質倍率は、総合型選抜1.4倍、公募型学校推薦選抜1.4

倍、一般選抜前期 1.6 倍、一般選抜後期 2.0 倍、共通テスト利用型 3.5～3.8 倍でありいずれの区分も前年と同様の倍率であり、入学者の高校ランクも同様であった。入学した学生の能力は維持されていると考えられる。1 年生前期の入試区分ごとの累積 GPA の平均点は、2.97～3.64 点であり、指定校 B が 2.97 点と若干の低値であったが全区分において高値であった。令和 5 年度の指定校は学生数が 4 名のみであるため一般化が困難であるため、令和 6 年度の指定校 8 名も含め評価を続けたい。なお、主に面接により選抜された総合型選抜の学生の平均も 3.34 点であり高値であった。

定員 95 名の募集に対して、現在は 1 年生と 2 年生それぞれ 98 名が在籍している。今後も入学する学生の質を維持・向上させるためには、志願者数の増加が重要である。その方策として、女子中高生の理系選択比率を高めるために、オープンキャンパスにおいて受験生と保護者を対象とするパソコンを用いたデータサイエンス体験コーナーを学部 2 年生が主催するイベントを令和 6 年 6 月に行い約 40 名の参加があり盛会であった。年内のオープンキャンパスにおいて当該イベントを複数回開催しデータサイエンスを女子中高生へ啓蒙する計画である。一方、高校訪問や模擬講義を通じて、女子生徒や高校教員の方々へのデータサイエンスの啓蒙活動を継続する計画である。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

令和 5 年に比べて令和 6 年入試の延べ志願者数は減少したが、年内に実施される総合型選抜や公募型学校推薦選抜の志願者数は増加した。特に総合型選抜の受験者は本学でデータサイエンスを学ぶ意欲が高く基礎学力に問題がなければ成長が期待されるため、今後も志願者数を増加させたい。延べ志願者数が減少した中でも各選抜区分の実質倍率は維持され、入学者の高校ランクも維持されている点は良い点である。

【問題点】

入試の受験倍率が維持されている点は良い点であるが、より良い学生を確保するためにも、延べ受験者数が減少した点は問題点である。前述の各種の啓蒙活動を続ける必要がある。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

京都女子大学のデータサイエンス学部は、令和 5 年に新設された学部であるため社会での認知度が十分ではない。本学データサイエンス学部を選択する女子高校生比率を高めるために、高校訪問や模擬授業を継続すると共にコンピュータを用いた生徒と保護者のデータサイエンス体験コーナーのようなオープンキャンパスでの新しい企画イベントを継続する計画である。更に、令和 6 年度には学部 1 年生及び 2 年生の複数の代表者から構成される DS 学生キャラバン隊を作り、学科会議にも適宜参加してもらい学生と教員間で種々の方策を検討する計画である。

教員・教員組織

1. 現状分析

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目①

教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。

<評価の視点>

- ・大学として求める教員像や教員組織の編制方針に基づき、教員組織を編制しているか。
※具体的な例
 - ・科目適合性を含め、学習成果の達成につながる教育や研究等の実施に適った教員構成。
 - ・各教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理。
- ・授業において指導補助者に補助又は授業の一部を担当させる場合、あらかじめ責任関係や役割を規程等に定め、明確な指導計画のもとで適任者にそれを行わせているか。

参照資料

- ・教員組織の編成方針
- ・科目群別非常勤教員比率
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料 ()

【現状分析】

データサイエンス学部は、設置審の教員審査を経て令和5年度に新設され令和8年度に完成年度を迎える計画である。現在は、学部教育を十全に展開できる教員組織となっている。完成年度には学生定員95名に対して16名の専任教員という教員組織を計画している。各研究室に配属される学部学生は各学年6名程度であり、丁寧な教育と研究を行える教員体制となっている。研究についても、令和5年度あるいは令和6年度に、14名の専任教員のうち多くが公的資金や外部資金を獲得しており、各専門領域の研究も積極的に行っている。一方で、令和5年度と令和6年度は、前述のように通常のゼミ・授業に加え、DS Café、アカデミックカウンセリング、企業自治体との種々の社会連携を行っており、教員の教育エフォートが研究エフォートを上回る状態が続いている。持続可能な学部・学科運営のために、学科会議での教員間の継続的な議論を通じて、学生教育の方法について効率性を高め最適化を図る計画である。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目②

教員の募集、採用、昇任等を適切に行っていること。

<評価の視点>

- ・教員の募集、採用、昇任等に関わる明確な基準及び手続に沿い、公正性に配慮しながら人事を行っているか。
- ・年齢構成に著しい偏りが生じないように人事を行っているか。また、性別など教員の多様性に配慮しているか。

参照資料

- ・教員の性別・年齢・職位構成
- ・各種会議の議事録等
- ・その他参照した資料 ()

【現状分析】

令和6年度に1名の教員の退職に伴い、1名の採用人事を公募により公正性に配慮して行っている。また、現在の学部教員の年齢及び性別には偏りがみられるため、学科会議での議論を通じ

づき改善の方策を検討している。

自己評価：S (A) B・C

評価項目④

教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。

<評価の視点>

- ・教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
- ・点検・評価の結果を活用して、教員組織に関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料

- ・各種会議の議事録等
- ・過年度自己点検評価シート
- ・その他参照した資料 ()

【現状分析】

データサイエンス学部は、設置審の教員審査を経て令和5年度に新設され令和8年度に完成年度を迎える学部である。少なくとも現在の教員組織を維持して、計画したデータサイエンスの教育プログラムを実行し完成年度を迎える必要がある。一方で、現在の教員組織は、年齢や性別に偏りがあるため、将来の教員組織のあり方について学科会議において継続的に議論する計画である。点検・評価プロセスについても、学科会議において同様に議論する。

2. 分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

データサイエンス学部は、設置審の教員審査を経て設置された新学部であり、現在は学部教育を十全に展開できる教員組織となっている点が長所である。各教員は、教育面で多くの業務がある中で各所属学会において、研究の学会発表や論文発表を積極的に行っている。

【問題点】

現在の教員組織は、年齢や性別に偏りがあるため、将来的にわたって良質の教育研究を継続的に提供できる教員組織を構築し続ける必要がある。

3. 改善・発展方策

【改善・発展方策】

令和8年に学部完成年度を迎えるため、将来の教員組織のあり方についても学科会議において継続的に議論する。現在は学部には助教がいいため、例えば若手の助教を採用することにより教員組織の活性化につながると考えられる。国内のデータサイエンス領域の教員人材は不足しているため、学会などにおいて候補者の探索を続けることも重要である。